

# 赤羽台団地の共用空間と 居住者ネットワーク

Common-Use Spaces and the Residents' Network in Akabanedai Danchi

篠原聡子

SHINOHARA Satoko

- ①「住戸」の供給から「街」の供給へ
- ②集会所というユニバーサルスペース
- ③住戸からはみ出し空間
- ④都市機能を補完した集会所
- ⑤不足と不満のネットワーク
- ⑥集会所コミュニティ
- ⑦点と線と面の共用空間

## 【論文要旨】

日本住宅公団によって昭和34年から建設がはじまった赤羽台団地（所在地：東京都北区、総戸数：3373戸）は、団地としての様々な試みが実現した記念的な団地といえる。本稿では、その中に配置された共用空間と居住者ネットワークに着目して、その関係について考察する。

その後の団地計画の中で普遍的な位置づけをもつ共用空間として集会所があげられるが、当初、計画者の中にどのように使用されるか確たるイメージはなかった。韓国の集合住宅団地の共用空間との比較から、日本の団地空間に出現した集会所や集会室は、本来、住宅の内側にあった「寄り合い」や「集会」という社会的機能を私的領域から分離する役割を果たし、その空間的な設えも日本の伝統的な続きの構成が採用されていた。また、幼児教室、葬式などにも使用され、集会所は、都市的な機能の補完の役割も果たした。しかし、集会所が既存の建築の代替的、補完的なものであっただけでなく、高齢者の集まりである「樺の会」のような集会所コミュニティともいえるべき、中間集団の形成に関与したことも特筆されなければならない。

一方で、居住者によって設立された、牛乳の共同購入のための牛乳センターは、極めて小規模ながら、自治会という大規模な住民組織の拠点となった。また、住棟によって、囲われた中庭は、夏祭りなどに毎年使われ、赤羽台団地の居住者の、その場所への愛着を育む特別な場所となり、居住者の間に緩やかな連帯感を形成する役割を果たした。

団地という大空間にあっては点のような存在でありながら自治会という大組織の拠点となった象徴的な空間としての「牛乳センター」、一列の線のように配置され、とくに機能もさだめられず、分節されながら多目的につかわれ、多様な中間集団の形成に関与したユニバーサルな空間としての「集会所」、それらを時間的、空間的に繋ぐ基盤面となった包容する空間としての「中庭」は、居住者ネットワーク形成に多面的にかかわり、それらが連携して使われることによって、団地という抽象的な集合空間は、赤羽台団地という生活空間となった。

【キーワード】 団地、共用空間、居住者ネットワーク、集会所、コミュニティ